

論文以外のコンテンツ

雑誌名	白山人類学
巻	20
発行年	2017-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00008982/



白 山 人 類 学

20 号

2017 年 3 月

目 次

《特集》インドネシアにおける消費様式の変化と地方中間層の動態

序 間 瀬 朋 子…………… 1

< 論 文 >

ジョグジャカルタ特別州村落部における健康と消費

——「中間層的ライフスタイル」を求めて 合 地 幸 子…………… 7

生活用品をめぐる「モノ」語り

——インドネシア共和国ランブン州バンダルランブン市の事例から

金 子 正 徳…………… 29

携帯電話と電力への欲求

——インドネシア，西ティモールの農村の事例 森 田 良 成…………… 57

HAKUSAN JINRUIGAKU

Hakusan Review of Anthropology

Vol. 20

March 2017

CONTENTS

Special Theme: Changing Consumption Style in Current Indonesia:

Focusing on Rural “Middle Class”

MASE Tomoko Introduction 1

< Articles >

GOCHI Sachiko Consumption Associated with the Health Care in Rural
Yogyakarta, Indonesia: Seeking "Lifestyle like Middle Class" ---7

KANEKO Masanori Stories about Household Goods of Indonesian People: A Case
Study of Bandar Lampung City, Lampung Province,
Indonesia29

MORITA Yoshinari Consumptive Desire for Mobile Phones and Electric Power:
Case of a Rural Community in West Timor, Indonesia57

白山人類学研究会

白山人類学研究会は、東洋大学社会学部社会文化システム学科の教員を世話人として組織されている。定例研究会は、原則として毎月第3または第4月曜日、東洋大学8号館で開催される。また、2007年度からは年次フォーラムを開催している。8~9月は夏休み、2~3月は春休みとし、研究会は開催しない。研究会の案内は電子メールを通じておこなっている。

連絡先：研究会事務局 hakusanjinrui@gmail.com

白山人類学研究会 2016年度の活動

□ 2016年5月16日第1回研究会

演題：バリ島の火葬儀礼の変容——新たな選択肢としての火葬場を事例として

発表者：小池 まり子（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）

要旨：本発表で取り上げるインドネシア・バリのヒンドゥー教徒の火葬儀礼は、先行研究において、ヒンドゥー教徒が属する慣習村の火葬/埋葬のための共有地で実施され、またその実施には膨大な経済的負担と労力が必要とされると言われてきた。しかし、ヒンドゥー教徒のパセツという親族集団の組織が、経済的負担が少ない費用で利用できる火葬場を2008年末から運営し始めたことにより、従来の火葬儀礼のあり方に新たな変化が見られる。本発表では、ヒンドゥー教徒の親族組織が運営する火葬場における調査結果から、ヒンドゥー教徒が慣習村と火葬場のそれぞれの場における火葬儀礼のあり方についてどのように考えているかを明らかにし、この火葬場が火葬儀礼を行う場として新たな選択肢の一つとなりつつあることを示した。

□ 2016年6月20日第2回研究会

演題：林産物交易が編み上げたボルネオの後背地社会——形成過程からの考察

発表者：佐久間 香子（京都大学東南アジア研究所）

要旨：ボルネオ島は東南アジア島嶼域の中でもマレーシア、インドネシア、ブルネイの3か国が領有する唯一の島であり、地理的・文化的に東南アジア島嶼地域の中心に位置している。歴史的観点からみれば、海洋交易における一大資源産出地であると同時に航路上の重要な中継地点として、近隣の島々、中国などのユーラシア大陸、そして西欧列強から多様な人びとが往来してきた重要地点でもあった。海を行き交った海洋貿易に連動して栄枯盛衰を経験したのは港市だけではない。ボルネオ島の一次産物を産出してきた後背地において、交易はいかなる影響をもたらしてきたのかについては、人類学からも歴史学からもあまり関心が払われてこなかった。そこで本発表では、ボルネオの林産物の河川交易が後背地社会に及ぼした

影響に着目した。林産物の中でも、本報告ではツバメの巣を取り上げ、その採集と交易の拠点村落が流域レベルでの政治的経済的リーダーとなっていく過程を明らかにした。加えて、近年のツバメの巣の流通・消費について若干の考察をした。

□ 2016 年 7 月 11 日第 3 回研究会

演題：「国境を跨ぐ生活スタイル」とは——国際人口移動統計からのアプローチ：東洋大学井上円了記念研究助成大型研究調査対象国を中心に

発表者：Ling Sze Nancy Leung（東洋大学アジア文化研究所）

要旨：井上記念研究助成大型研究は日本、韓国、中国、タイ、ラオス、インドネシア、ネパール、インド、シンガポール 9 カ国を中心に「国境を跨ぐ家族生活」について研究している。東アジア、東南アジア及び南アジアにおける国際人口移動は、1980 年代以降、活発化している。国際人口移動は労働力移動のみならず、家族再会、結婚、教育、定住あるいは永住型の移動もある。移動の形態によって、国境を跨ぐ多様な家族形態を形成すると考えられる。国境を跨ぐ家族の実態を分析する以前に、調査対象となる 9 カ国における国際人口移動の状況を明らかにする必要がある。したがって、本発表では統計データを通じてこの 9 カ国における国際人口移動の現状を把握することを目的とし、発表した。

□ 2016 年 10 月 24 日第 4 回研究会

演題：ベトナム—カンボジア国境をめぐるローカルな政治——冷戦終結後メコンデルタの人々の越境移動

発表者：下條 尚志（京都大学東南アジア研究所）

要旨：1970 年代後半にベトナムがカンボジアに侵攻してからの 10 年間、この 2 つの国家が国際社会からの孤立と戦争、社会主義政策に起因する混乱を経験し、数多くの国外脱出者を生み出したことは周知のとおりである。一方で、この侵攻を機に、多数の人々がベトナム南部メコンデルタからカンボジアへ非法的手段で越境し始めたことはあまり知られていない。非法越境者の数は、とりわけ冷戦終結後の 1990 年代前半、メコンデルタ農村の貧困と UNTAC 下ブノンペン（プノンペン）の活況を背景に急増した。これら越境者のなかには、1990 年代後半以降にベトナムが国際社会への復帰と経済成長を着実に進めてゆくなかで、度々ベトナム側に帰郷する者が現れ始めている。この傾向を受け、ベトナム政府は近年ようやく越境者の移動制限や国籍特定など、国境統治に本腰を入れつつある。しかしながら、越境者の管理強化によって、これまで政治経済的混乱のなかで棚上げにされてきたメコンデルタの民族や宗教に関する諸問題が、再び顕在化している。本発表では、人々の越境移動という観点から、冷戦終結以降のメコンデルタにおける地域社会と国家の関係が、いかに変遷してきたのかについて考察した。

□ 2016 年 12 月 19 日第 5 回研究会

演題：「あるくみるきく」——宮本常一の観察と思考

発表者：須藤 護（龍谷大学名誉教授）

要旨：旅を続ける中で、車窓から観察した山や海、田んぼや畑、集落や民家などの景観、また地域の人びとから聞き書きしたおびただしい量の資料を土台にして一つの論を組み立てていく。この宮本常一の観察と思考の過程を検証していくことで、日本人のものの考え方や暮らし方がいかにして形成されてきたか、を明らかにした。

□ 2017年1月16第6回研究会

演題：タイの民間医療をめぐる法的状況と治療師の実践

発表者：古谷 伸子（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）

要旨：1980年代以降、タイでは知識人やNGOを中心にマッサージやその他の伝統医療が再評価されるようになり、1990年代に入ると保健省内に設置されたタイ医療研究所（後にタイ医療代替医療開発局）によって、伝統医療の制度化や普及活動が進められるようになった。そうした中央での動きと並行して、地方の民間治療師たちもまた、その実践を大きく変化させてきた。限定的ではあるが彼らの一部は公的保健医療の一端に組み込まれ、また各地で形成された治療師グループでの活動をととして新たな知識と経験、クライアントを得ることとなり、活躍の場を拡大してきた。本発表では、そうした過程において、医療行為や薬の売買をめぐる法的制約も多いなか、治療師たちがそれらといかに折り合いをつけ、自らの正当性を確保しつつクライアントのニーズに応えてきたのかを明らかにした。

□ 2016年11月19日第9回研究フォーラム

「インドネシアにおける消費様式の変化と地方中間層の動態」

企画者：間瀬 朋子（東洋大学社会学部）

趣旨：本フォーラムは、インドネシアの中間層というテーマを、ジャカルタを筆頭とした大都市ではなく、地方都市や農村から検討することを試みた。中間層をめぐる社会経済的な背景がつねに変化しているようすを描写し、従来おもにジャカルタ首都圏の事例をもって生活様式として観察されてきた中間層の像や概念がインドネシアの他地域にも当てはまるのかどうかを検証した。その際、(1) 消費様式が変化する様相や速度（中央 / 都市が経験中の急速な変化のほか、地方 / 農村での経済成長の遅れ、中央 / 都市とのギャップ、旧来型の消費様式や生活様式への拘泥など）と (2) 地方（⇔中央 / 首都ジャカルタ）、ジャワ島外（⇔ジャワ島）、村落部（⇔都市部）における消費様式と中間層という2点に留意して、現代インドネシアの社会経済の動態に迫った。

プログラム：

13:00-13:10 趣旨説明（間瀬朋子）

13:10-13:50 発表 (1) 間瀬 朋子 (東洋大学)

「消費現場の変容：ジョグジャカルタ特別州スレマン県の学生街における大学生の消費様式と“インフォーマル・セクター”の商売様式から」

13:50-14:30 発表 (2) 合地 幸子 (東京外国語大学)

「ジョグジャカルタ特別州の中間層にみる健康と消費：保健医療サービスの外側で」

14:30-14:45 休憩

14:45-15:25 発表 (3) 森田 良成 (大阪大学大学院)

「携帯電話の普及と利用状況にみるインドネシアの地方農村部の現在：東ヌサ・トゥンガラ州西ティモールを事例に」

15:25-16:05 発表 (4) 金子 正徳 (東洋大学アジア文化研究所)

「インドネシア共和国ランバン州の生活用品調査に基づくライフスタイルの変化」

16:05-16:15 休憩

16:15-16:45 コメント 新井 健一郎 (亜細亜大学)

16:45-17:30 ディスカッション

『白山人類学』投稿規定

1. 本誌の名称および目的

本誌は、日本語名を『白山人類学』、英語名を *Hakusan Review of Anthropology* と称し、白山人類学研究会の会誌として、会員による研究成果の発表およびこれに関連する情報・資料を提供するものである。本誌は年 1 回 3 月に刊行される。

2. 投稿資格

投稿は原則として本会会員に限る。ただし、編集委員は非会員に対しても寄稿を依頼することがある。

3. 掲載原稿

原稿は、広義の人類学的な視点に立った研究成果を中心とする。その種類は、原則として以下のように区分する。

- a. 論文（研究成果の発表）
- b. 研究ノート（試論的な報告）
- c. 翻訳（日本語以外の言語による論文の日本語訳）
- d. 資料（フィールドワーク等に基づく一次資料、原典史料の提供）
- e. 書評（新刊書の書評）
- f. 資料紹介・研究活動紹介（公開資料や研究活動、学術集会などの紹介）
- g. フィールド通信（フィールドワークの記録や短報）

a-c は 400 字詰め横書き原稿用紙で概ね 60 枚以内、d は 30 枚以内、e-g は 15 枚以内とする。いずれも未発表のものに限る。原稿には論文タイトル、投稿者の氏名、所属機関、所属機関、連絡先（電子メールアドレス）、英語タイトル、ローマ字氏名、所属の英語名を付記すること。a および b には、200-500 語程度の英文要旨、日本語および英語のキーワードをつける。

4. 原稿の作成・投稿の手続き

- (1) 原稿の作成にあたっては、本誌の執筆要項に従うこと。
- (2) 使用言語は日本語または英語に限る。日本語については、できるだけ常用漢字・新かなづかいを使用する（英語論文の執筆要領等については、編集委員に相談すること）。
- (3) 原稿は原則として MS ワードで作成し、電子メールに添付して編集委員に送付する。あるいは USB メモリ等の電子媒体に保存の上、編集委員に郵送する。電子メールの本文または郵送の場合は別紙に、使用ソフトのバージョン等を明記すること。
- (4) 日本語タイトル、執筆者の氏名、連絡先、使用ソフトのバージョン等を本誌巻末掲載の「投稿票」の様式に従って記入し、原稿とは別の「投稿票」ファイルとして電子メールに添付して編集委員に送付する。原稿郵送の場合は、プリントアウトしたものを原稿に同封すること。投稿票は、白山人類学研究会ウェブサイト（下記 8「原稿の送付先・問合せ先」参照）からダウンロードすることもできる。
- (5) 電子メールによる送付、郵送、いずれによる投稿の場合も、編集委員は電子メールで受領確認を投稿者に送付する。投稿後の一定期間、編集委員から連絡がない場合は、添付なしの電子メールか電話で編集委員に問い合わせること。

- (6) ウィンドウズ標準フォントに存在しない特殊文字，または制御記号や文字飾りを使用する場合は，投稿時に編集委員に相談すること。
- (7) 図，表，写真は，原則として原稿本体とは別に準備し，「図」，「表」，「写真」等の名のファイルにまとめること。送付方法は原稿の場合と同じ。原稿採用後，編集委員が図，表，写真のレイアウトや提出方法を別途指示することもある。
- (8) 郵送された原稿（図，表，写真を含む）および電子媒体は，本誌への採否に関わらず投稿者に返却しない。刊行後しばらく保管した後，編集委員で処分する。
- (9) 各号の投稿締切日は毎年 11 月 30 日とする。

5. 原稿の採否・最終原稿の提出手続き

- (1) 論文・研究ノートの採否ならびにその区分については，投稿，依頼を問わず，本誌の査読規定に従うものとし，原則として 2 名の査読者（レフェリー）による査読の上，編集委員が決定する。原稿採用の条件として原稿の修正を求める場合がある。
- (2) 著者による校正は，原則として初校のみとする。誤字・脱字と誤植以外の変更は，必要最低限にとどめる。加筆および訂正が必要以上に多い場合は，採用を取り消すこともある。

6. 原稿料の支払い等

- (1) 原稿料の支払いはしない。
- (2) 抜き刷りは，著者負担で作成することとする。

7. 著作権

採用原稿については，著作権のうち，複製権，翻訳・翻案権，公衆送信・伝達権（いずれも電子形態による場合を含む）を白山人類学研究会代表に譲渡することとする。

8. 原稿の送付先・問合せ先（2017 年度）

〒112-8606 東京都文京区白山 5-28-20

『白山人類学』編集委員

東洋大学社会学部 山本須美子（編集委員長） 箕曲在弘

E-mail: yamamoto-s@toyo.jp/ minoo@toyo.jp

*電子メールに添付して原稿を送付する場合は，かならず双方あてに送信すること。

白山人類学研究会ウェブサイト：<http://hakusan-jinruigaku.toyo.ac.jp>

9. 本規定の改廃

本規定の改廃は，白山人類学研究会運営委員の承認によっておこなう。

10. 附則

本規定は，2017 年 4 月 1 日から施行する。

『白山人類学』執筆要領

はじめに

本誌の表記と体裁を統一し、多くの読者に読みやすいものとするため、この執筆要領にしたがってご執筆ください。執筆要領の内容は主として論文および研究ノートの作成を念頭においていますが、その他の原稿を作成する場合も、原則としてこの執筆要領に準拠してください。

1. 原稿の形態

- 1-1 原稿は原則として MS ワードで作成し、電子メールに添付して編集委員に送付する。
- 1-2 ウィンドウズ標準フォントに存在しない特殊文字、または制御記号や文字飾りを使用する場合は、投稿時に編集委員に相談すること。
- 1-3 図、表、写真は、原則として原稿本体とは別に準備し、「図」、「表」、「写真」等の名のファイルにまとめること。
- 1-4 投稿原稿の MS ワードの設定は、A4 版、横書き、余白：上下左右 30mm、一行の文字数：38 字、行数：40 行、行間：1 行、フォントサイズ：11 ポイント、用紙の端からの距離：ヘッダー・フッターともに 15mm とすること。
- 1-5 日本語は、章の表題、節の表題については全角 MS ゴシック、本文および脚注文については全角 MS 明朝を使用する。
- 1-6 ローマ字アルファベットおよび数字は、原則としてすべて半角 century を使用する。
- 1-7 英文要旨については、原則として英文校閲の専門家による校閲を受けたものを提出すること。なお、編集委員が別途、英文校閲の専門家に依頼して、言語的修正をおこなうこともある。

2. 論文の構成

- 2-1 原稿は以下のような構成とする。ただし、翻訳、資料、書評、資料紹介・研究活動紹介、フィールド通信には、キーワードおよび英文要旨を付さない。翻訳の原文が英語の場合は、英語タイトルを重ねて記す必要はないが、原文が英語以外の場合は原文タイトルの英語訳を記す。

- (1) 日本語タイトル
- (2) 日本語氏名
- (3) 日本語所属（**大学**研究科等）
- (4) 電子メールアドレス
- (5) 英語タイトル
- (6) ローマ字氏名
- (7) 所属の英語名

*英語タイトルについては編集委員の責任で変更を加えることがある。

なお、最終原稿において所属は、氏名の末尾に上付きアスタリスク（、日本語氏名末は全角 MS 明朝、英語氏名末には半角 century）を付して、脚注ブロックにアスタリスク（半角 century）を入れ、半角スペースをあけて、所属のみを日本語で、続けて全角セミコロン（;）の後に、所属・住所/電子メールアドレスを英語で記す。

例:

* 東洋大学社会学部 ; Faculty of Sociology, Toyo University, 5-28-20, Hakusan, Bunkyo, Tokyo, 112-8606/ hakusantarou@toyo.jp

- (8) 英文要旨 (200-400 語程度)
- (9) 日本語キーワード (5 語前後)
- (10) 英語キーワード (5 語前後)
- (11) 本文
- (12) 注

*脚注方式とし、各ページの下部に示す。

- (13) 謝辞 (必要な場合)
- (14) 参考文献 (見出しは「参考文献」とする。参照文献, 引用文献等としない)
- (15) 図, 表, 写真は, 原則として原稿本体とは別に準備し, そのファイルを保存した電子媒体とあわせて, プリントアウトしたものを編集委員会に郵送する。本文中に挿入箇所を示しておくこと。図, 表, 写真についても, 電子ファイルの形式は, 原則として MS ワードによるものとする。他のファイル形式で提出する場合は, 投稿時に編集委員に相談すること。原稿採用後の図, 表, 写真の提出方法については, 編集委員が別途指示する。

2-2 章・節等の表記は、以下のとおりとする。

- (1) 章番号は, 半角ローマ数字 (I, II..., フォントは century) で示す。
- (2) 節番号は, 半角アラビア数字 (1, 2..., フォントは century) で示す。
- (3) 節以下を細分する場合には, (1)/1-1/1.1, (2)/1-2/1.2...などを適宜用いる (書式は統一すること)。
- (4) 章, 節には数字だけではなく必ず表題をつける。
- (5) 章のローマ数字は, 全角特殊文字 (I, III, IV など) を用いず, 必ず半角 century (I, III, IV など) で入力すること。II, IV, IX などは, I, V, X などの組み合わせで入力する (例: IV は “I” と “V” を組み合わせる)。0 9 0 - 5 2 1 3 - 8 7 5 0
- (6) 章と節の数字の後ろに点はつけず, 半角 2 文字分のスペースを入れて表題を記す。
- (7) 章見出しの前と後ろの行にはそれぞれ 1 行分の空行を, 節以下の見出しの前の行には 1 行分の空行を入れること。

3. 日本語文章の表現

- 3-1 本論では, 現代かなづかい (ただし引用文は原文どおり) を用いる。
- 3-2 字は新字体を用い, 難しい漢字はなるべく避ける。
- 3-3 接続詞, 副詞, 助動詞, 代名詞はなるべくかな書きにする。
例: 所謂→いわゆる 丁度→ちょうど 又→また, 但し→ただし
- 3-4 繰り返しの記号のうち, かな文字の反復記号 (ゝ等) は避け, 漢字の反復記号 (々) は用いる。
例: あゝ→ああ 人人→人々
- 3-5 句点はマル (。), 読点はカンマ (,) を用いる。いずれも全角にすること。
- 3-6 漢字名以外の外国の人名・地名等はカタカナで表記する。必要に応じ, 初出時にマル括弧内に原綴りを記す。

例: ギアツ (Clifford Geertz), サンダカン (Sandakan)

- 3-7 和文にかかる括弧 (マル括弧, 大括弧, キッコウ括弧等) は, 原則としてすべて全角とする。
- 3-8 パソコンの機種依存文字は文字化けの原因になるので, できるだけ使用しない。たとえば, ①は(1), IIIは III とする。
- 3-9 名詞を並列する場合は, 全角カンマ (,), ナカグロ (・) を適宜, 用いる。
- 3-10 引用文は前後にカギ括弧「 」をつける。ただし, 引用が比較的長いときには, 改行してブロックとする。引用ブロックは左側全体を 2 文字インデントし, さらにその 1 行目を 1 字下げる。前後のカギ括弧「 」はつけない。引用ブロックと前後の本文との間には 1 行分の空行を入れる。引用の直後に文献を指示する。引用文中の引用者補記は, キッコウ括弧〔 〕に入れる。

4. 数字・年号

- 4-1 数字は, 数値の表現には半角アラビア数字, 概念の表現には漢数字を使用する。適宜, 桁を区切る半角カンマ (,) を入れる。
例: 1990 年, 3,120 人, 一流, 第二次世界大戦
- 4-2 分数は, 3 分の 1, 20 分の 7 のように示す。パーセントは% (半角 century) とする。
- 4-3 数の幅は半角ハイフン (-) を用いる。
例: 3-6 人, 1880-90 年
- 4-4 メートル, トン等の数値単位はカタカナ書きとする。
- 4-5 年号には原則として西暦を用い, 必要に応じて日本の元号, 中国暦, 朝鮮暦, ジャワ暦, イスラーム暦などを併記する。
- 4-6 図, 表は横書きを原則とする。番号および表題は, 図／表, 図／表番号 (半角数字), 半角スペース 2 文字, 表題の順で記す。
例: 図 1 魚醤の分布

5. 参考文献

論文を書くために参照した文献ならびに引用した文献については, 以下のように表記する。注をたてて表記することはしない。

- 5-1 文中の引用表記 (以下の “=” は, 実際には表記しない)
 - (1) 全角大 (始) = 著者名 (ファミリーネームのみ) = 半角スペース = 刊行年 = 半角コロン = 半角スペース = 参照／引用したページ数の範囲 = 全角大括弧 (終) とする (日本語文献, 英語等の文献いずれも同じ)。句読点は全角大括弧 (終) の後に置く。
例:
…である [末成 1999: 387-389]。…といわれている [Watson 1985: 593-594]。
 - (2) 論文集を参照／引用した場合は, (1)の様式で著者名にかえて編者名を次のように記載する。日本語の文献であれば, 編者名の後に「編」を付す。英語等の文献で編者が一人であれば, 著者名の後に “ed.” (または ed.に相当する当該言語の単語／略語), 編者が二人以上であれば “eds.” (または eds.に相当する当該言語の単語／略語) を付す。
例:

[加藤編 2004] / [植野・蓼沼編 2000]

[Hefner ed. 2002] / [Hefner and Horvatic eds. 1997]

- (3) 編著者が複数の文献を参照／引用した場合は、編著者名を次のように記載する。日本語文献については、ファミリーネームをナカグロでつなぐ。英語等の文献については、編著者が2人であれば、編著者のファミリーネームを“and”（またはandに相当する当該言語の単語）でつなぐ。編著者が3人以上であれば、編著者のファミリーネームを全角スラッシュでつなぎ、最後の編著者のファミリーネームのみ“and”でつなぐ。“&”は使用しない。
- (4) 同じ文献の異なる箇所を表記する場合は、半角カンマ（,）で参照箇所を分ける。
例:
[末成 1999: 387-389, 404]
- (5) 異なる文献を同時に表記する場合は半角セミコロン（;）を用いる。
例:
[末成 1999: 387-389; 2005: 107; 山本 2005: 12]
- (6) ウェブサイト（オンライン）の資料・論文等を参照／引用した場合は、まず上記の文献の場合の記載方法に従って著者名、編著者名、またはサイトの管理運営組織名を記し、その後に、日本語サイトの場合は「(オンライン)」を、英語等外国語のサイトの場合は“(online)”を付し、半角スペースの後、記事執筆年（もしくはデータの公開年）を記す。
例:
[外務省(オンライン) 2014] / [Department of Statistics, Malaysia (online) 2014]
- (7) *ibid*, *op. cit*, 前掲書などの表記は用いない。

5-2 参考文献一覧

- (1) 参考文献一覧は、本文または謝辞の後に「参考文献」として記す。記載するのは、本文や注で引用したものに限る。著者名のローマ字アルファベット順または50音（あいうえお）順で記載する。同一著者に複数の文献がある場合には、出版年順で文献を記す。同一著者に出版年が同じ文献が複数ある場合には1987a, 1987bなどとして区別する。参照・引用したウェブサイトについては、一覧表の最後に[ウェブサイト]といれ、その下部に別に記載する。
- (2) 複数の編著者の日本語文献を記す場合は、植野弘子・蓼沼康子（編）のように、編著者名をナカグロでつなぐ。ただし、カタカタ書きの外国人名を含む場合には、吉原和男／クネヒト・ペトロ（編）のように、ナカグロに代えて全角のスラッシュを用いる。
- (3) 複数の編著者の欧米語文献を記す場合、第1編著者については、氏名を倒置させてラスト・ネーム、ファースト・ネームの順とするが、第2編著者以降については、氏名を倒置させない（ただし本文中の引用では、編著者のすべてについてファミリーネームのみを記す）。編著者が2人の場合、編著者名は“and”（またはandに相当する当該言語の単語）でつなぐ。編著者が3人以上の場合は、編著者名は全角スラッシュでつなぎ、最後の編著者名のみ“and”でつなぐ。“&”は使用しない。
- (4) 日本語・欧米語以外の文献の記載法は、欧米語文献の例に準ずるが、著者名のファースト・ネーム、ラスト・ネームなどの配列は各言語の慣例に従う。

- (5) 雑誌名は原則として略語ではなく全て表記する。煩雑さを避けるために略語を使う場合は、略語一覧を参考文献表の冒頭に記す。
- (6) 副題は、原典の形式に関わらず、日本語文献の場合は全角ダッシュ二つ (——), ローマ字アルファベット使用言語の文献の場合は半角コロン (:) で示す。

5-3 参考文献表の表記

(1) 雑誌論文の場合

〔日本語〕 著者名 (改行) = 発行年 = 半角スペース 2 文字 = 「論文タイトル」 = 『雑誌名』 = 巻 = 半角マル括弧 (始) = 号 = 半角マル括弧 (終) = 半角コロン = 半角スペース = 掲載ページ範囲 = 全角ピリオド

〔英語等〕 著者名 (改行) = 発行年 = 半角スペース 2 文字 = 論文タイトル = 半角カンマ = 半角スペース = イタリック雑誌名 = 半角スペース = 巻 = 半角マル括弧 (始) = 号 = 半角マル括弧 (終) = 半角コロン = 半角スペース = 掲載ページ範囲 = 半角ピリオド

例:

松村圭一郎

2007 「所有と分配の力学——エチオピア西南部・農村社会の事例から」『文化人類学』72(2): 141-164.

Bird-David, Nurit.

1990 The Giving Environment: Another Perspective on the Economic System of Gatherer-Hunters, *Current Anthropology* 31(2): 189-196.

(2) 論文集に掲載されている論文の場合

〔日本語〕 著者名 (改行) = 発行年 = 半角スペース 2 文字 = 「論文タイトル」 = 『論文集名』 = 編者名 = 全角マル括弧 (始) = 編 = 全角マル括弧 (終) = 全角カンマ = 所収ページ範囲 = ページ = 全角カンマ = 発行地名 = 半角コロン = 半角スペース = 出版社 = 全角ピリオド

〔英語等〕 著者名 (改行) = 発行年 = 半角スペース 2 文字 = 論文タイトル = 半角カンマ = In = イタリック論文集名 = 半角カンマ = edited by = 編者名 = 半角カンマ = pp. = 半角スペース = 所収ページ範囲 = 半角カンマ = 発行地名 = 半角コロン = 半角スペース = 出版社 = 半角ピリオド

例:

末成道男

1999 「ベトナムから見た漢族家族の特徴」『中原と周辺——人類学的フィールドワークからの視点』末成道男 (編), 387-408 ページ, 東京: 風響社.

Watson, James L.

1986 Anthropological Overview: The Development of Chinese Descent Group, In *Kinship Organization in Late Imperial and Modern China, 1000-1940*, edited by Ebrey, Patricia Buckley and James L. Watson, pp. 274-292, Berkeley: University of California Press.

(3) 単行本の場合

〔日本語〕 著者名（改行）＝発行年＝半角スペース 2 文字＝『書名』＝発行地名＝半角コロ＝半角スペース＝出版社＝全角ピリオド

〔英語等〕 著者名（改行）＝発行年＝半角スペース 2 文字＝イタリック書名＝半角カンマ＝発行地名＝半角コロ＝半角スペース＝出版社＝半角ピリオド

例:

末成道男

1983 『台湾アミ族の社会組織と変化——ムコ入り婚からヨメ入婚へ』 東京: 東京大学出版会.

Freedman, Maurice

1958 *Lineage Organization in Southeastern China*, London: The Athlone Press.

(4) 論文集の場合

〔日本語〕 編者名＝全角マル括弧（始）＝編＝全角マル括弧（始）（改行）＝発行年＝半角スペース 2 文字＝『書名』＝発行地名＝半角コロ＝半角スペース＝出版社＝全角ピリオド

〔英語等〕 編者名＝半角マル括弧（始）＝ed（編者が一人）／eds（編者が二人以上）＝半角ピリオド＝半角マル括弧（終）（改行）＝発行年＝半角スペース 2 文字＝イタリック書名＝半角カンマ＝発行地名＝半角コロ＝半角スペース＝出版社＝半角ピリオド

例:

加藤剛（編）

2004 『変容する東南アジア社会——民族・宗教・文化の動態』 東京: めこん.

植野弘子・蓼沼康子（編）

2000 『日本の家族における親と娘——日本海沿岸地域における調査研究』 東京: 風響社.

吉原和男／クネヒト・ペトロ（編）

2001 『アジア移民のエスニシティと宗教』 東京: 風響社.

Hefner, Robert W. (ed.)

2002 *The Politics of Multiculturalism: Pluralism and Citizenship in Malaysia, Singapore, and Indonesia*, Honolulu: University of Hawai'i Press.

Hefner, Robert W. and Patricia Horvatic (eds.)

1997 *Islam in an Era of Nation-States: Politics and Religious Renewal in Muslim Southeast Asia*, Honolulu: University of Hawai'i Press.

(5) 再版された図書，発行後に書籍に収録された論文を参照した場合

参照した図書の発行年を最初に記し，半角マル括弧（ ）内に初版年を記す。必要に応じて初版の書誌情報を入れる。

例:

馬淵東一

1974(1938) 「台湾高砂族の父系制における母族の地位」『馬淵東一著作集 第三巻』 9-65 ページ，社会思想社（初版: 『民族学年報』 1）.

(6) ウェブサイト上（オンライン）の資料・論文等を参照した場合

〔日本語〕

著者名（またはサイトの管理運営組織名）（改行）＝記事執筆年（もしくはデータの公開年）＝「ページ名」＝年月日アクセス＝全角ピリオド（改行）＝URL

〔英語等〕

著者名（またはサイトの管理運営組織名）（改行）＝記事執筆年（もしくはデータの公開年）＝“ページ名”＝半角ピリオド＝Accessed on Month Date, Year＝半角ピリオド（改行）＝URL

＊URL にハイパーリンクが付されている場合は削除する。URL が 2 行以上にわたる場合は、適宜スペースを入れて改行する。

例:

外務省

2014 「日・インドネシア外相会談（概要）」2014 年 3 月 10 日アクセス.

http://www.mofa.go.jp/mofaj/s_sa/sea2/id/page3_000680.html

Department of Statistics, Malaysia

2014 “External Trade Indices, Malaysia”. Accessed on March 10, 2014.

http://www.statistics.gov.my/portal/index.php?option=com_content&view=article&id=1125&Itemid=111&lang=en

(7) その他

- ・ローマ字アルファベット使用言語の雑誌名・書名は、イタリック体とする。
- ・文献の表示の最後には、日本語・中国語の場合は全角ピリオド（．），ローマ字アルファベット使用言語の場合は半角ピリオド（.）を付す。
- ・日本語、中国語、ローマ字アルファベット使用言語以外の言語の文献の記載は、当該言語の慣習的な表記法に従う。

6. 注

- 6-1 注は脚注とする。文中で言及する場合は、必ず「注」と記す。「註」は使用しない。
- 6-2 注番号は 1 からおこし、1) のように半角数字、右側のみの半角マル括弧（終）で示す。フォントは **century**。注の数字とマル括弧は、本文中では注を付す箇所の右肩に上付きでつける（例：～である¹⁾）。ただし脚注ブロック内の注番号は、通常のフォントサイズで記し、上付きとしない。
- 6-3 投稿原稿における脚注ブロックの書式は任意とする。ただし、採用後提出する最終原稿においては、原則として脚注ブロック内のフォントサイズ、段落とも本文と同様にする。
- 6-4 注は原稿枚数に含まれる。枚数の 10% 以内を注の分量の目安とする（たとえば 50 枚の場合は 5 枚以内）。

7. 図・表・写真

- 7-1 図、表、写真は、原則として執筆者が作成したものをそのまま掲載する。本文中に挿入箇所を分かりやすく示すこと（例：「→図 1 を挿入」）。
- 7-2 図、表、写真には、通し番号をつける（例：図 1、図 2…、表 1、表 2…）。また、番号だけでなく必ず表題またはキャプションをつける。
- 7-3 図および写真の表題（またはキャプション）は下に、表の表題は上に記す。

- 7-4 図、表ともに作成の際に使用した資料・文献を「出典：**」というように明示する。
写真の場合は、撮影者を「**撮影」（または「出典：**」）というように明示する。

8. 歴史的呼称

歴史的呼称は当時の呼称に従い、新字体・現代かなづかいで表記する。

9. その他の注意

ワープロソフトを使用する際には、以下の点に注意して原稿を作成すること。

- 9-1 入力画面では区別がつかなくても、印字するとその差が目立つ文字、記号。

例：ー（長音）と—（ハイフン）

X（ローマ字のエックス）と×（バツ）、1（数字）とl（Lの小文字）

- 9-2 日本語の文字および外国文字については、原則としてウィンドウズで使用可能な文字で入力する。英語表記で用いられるローマ字アルファベット以外の外国文字、別途インストールが必要なフォント、その他の特殊な文字・記号・フォントを使用する場合は、事前に編集委員に相談すること。

『白山人類学』査読規定

1. 目的

白山人類学研究会は、『白山人類学』の学術雑誌としての水準を確保するため、査読の制度をおき、その運営については編集委員会が責任をもつ。

2. 対象

査読制度の対象となるのは、『白山人類学』に投稿された原稿（編集委員会からの依頼原稿を含む）のうち、論文および研究ノートとしての掲載を目的とするものである。

3. 査読者

編集委員会は、投稿された原稿1編について、2名の査読者を選定し査読を依頼する。査読者の氏名は投稿者に通知しない。また、投稿者の氏名も査読者に通知しない。

4. 査読の過程

査読者は、主に下記の第7項に挙げられた項目について、査読対象の原稿を評価し、掲載に関する判定をおこなう。査読者は、原稿に修正を求める場合、修正すべき点について具体的なコメントを記さなければならない。査読者は、定められた期日以内に、編集委員会に対して原稿の掲載に関する判定結果とその根拠を表明しなければならない。

5. 原稿の採択

編集委員会は、査読者の査読結果を十分に考慮・検討して、原稿掲載の可否を決定する。査読者2名の意見が大きく異なる場合は、編集委員会が査読者の意見をふまえつつ、独自に掲載の可否を判断することもある。編集委員会は、査読結果をすみやかに投稿者に通知しなければならない。

6. 原稿の修正

再審査が必要とされた原稿の投稿者は、定められた期日までに修正原稿を編集委員会に送付しなければならない。この際、投稿者は、査読コメントに対する自らの改稿内容について、文書で説明を行わなければならない。編集委員会は、判定が「修正条件付き掲載可」の場合には、原稿の修正が適切になされていることを確認したうえで、原稿の採択を決定する。判定が「修正後要再査読」の場合は、改めて査読者に査読を依頼する。

7. 査読の項目

査読者は以下の項目などを念頭において評価、判定、掲載区分の判断をおこなう。

A. 内容の評価

- (1) 広義の人類学に関わる学術的研究に貢献しているか
- (2) 記述されている内容は正確か
- (3) 議論の展開は適切かつ論理的か
- (4) 資料および文献の取り扱いが適切か

B. 表現・形式の評価

- (1) 表題・キーワードは扱われている内容に即して適切か
- (2) 文章の表現は明瞭で読みやすいか
- (3) 全体の構成や章・節の見出しの立て方は適切か
- (4) 図・表は有意に挿入され、かつ有効に使用されているか
- (5) 参考文献の記載方法は適切か

C. 採択の判定

- (1) 掲載可（修正を必要とせず、投稿時のまま掲載が可能）
- (2) 修正条件付き掲載可（主に技術面に関わる微細な修正のみを必要とする。再査読はおこなわない）
- (3) 修正後要再査読（再査読をおこなう）
 - a) 一部の用語、表現、パラグラフ等について、書き直しを必要とする
 - b) 一部の章または節について、書き直しを必要とする
 - c) 大幅な書き直しを必要とする
- (4) 掲載不可（内容が本誌の目的に即していない、あるいは学術誌掲載の水準に達していないことが明白な場合の判定。査読者は、評価およびコメントにより、判定の根拠を示さなければならない）

8. 本規定の改廃

本規定の改廃は、白山人類学研究会運営委員の承認によっておこなう。

9. 附則

本規定は、2017年4月1日から施行する。

編集後記

日本文化人類学会が発行する『文化人類学』をはじめ日本における文化人類学関連の会誌の数は、いったいいくつあるのだろうか。そして、これらの会誌はすべて順調に投稿論文の数を確保し、刊行し続けられているのだろうか。筆者は最近、複数の会誌の編集委員として、編集に携わる機会に恵まれた。これらの編集委員会で必ずと言っていいほど話題に上るのが投稿論文数の減少である。どの会誌も、決して順調に投稿論文の数を確保できているわけではないようである。

もちろん、論文が投稿されればそれでよしというわけではない。厳正な査読プロセスを経て、無事に掲載可能となる論文数は、投稿された本数に比べて少なくなるのが常である。したがって、刊行に必須となる論文数を確保するには、その数以上の投稿が望まれる。定期刊行物である学術誌では、投稿論文の数が揃わないからといって刊行を中止するわけにはいかない。そこで、是が非でも定期刊行しなくてはならないために、多くの会誌において「特集」が組まれ、あらかじめ編集委員会のほうで一定数の原稿を確保するのである。

さて、本誌『白山人類学』の場合はどうか。読者はすでに分かっているはずだが、今号は投稿論文がゼロ、特集論文 3 本のみの掲載となった。前号では投稿論文 4 本、特集論文 6 本（研究ノート含む）の計 10 本であったことをふまえると、今号の論文数は極めて少ないといえる。各号の背表紙を並べてみると、このアンバランスさが際立つ。もっとも、投

稿希望の連絡は数本あった。だが、締め切り日を過ぎても一本も投稿はなかった。

もちろん、待っていても投稿の増加が望めないことは分かっている。積極的に投稿を呼びかける努力は必要だ。だが、どの会誌も同じような努力をしても、原稿の取り合いになり、努力は徒労に終わる。この投稿論文不足の背景には、フィールドから帰ってきた大学院生が、投稿論文の執筆よりもむしろ博士論文の執筆に注力するという事情がある。今日では博士の学位がなければ就職先はないし、課程内での学位取得に対する圧力が強まっている。さらに、大学に就職した後は学内業務の多さから長期間の調査に出る余裕がなくなり、論文執筆さえも難しくなる。したがって、十分な質を保った投稿論文の執筆に時間を費やせるのは、極端に言えば学位取得後から就職までのポストドク期間だけとなる。このような研究環境の変化のなかで、全国で刊行される会誌の数が減るわけではない。さて、この課題を解決する方策はあるのだろうか。これから考えていきたい。

(箕曲 在弘)

白山人類学編集委員 Board of Editors

植野弘子*	UENO Hiroko*
長津一史	NAGATSU Kazufumi
松本誠一	MATSUMOTO Seiichi
間瀬朋子	MASE Tomoko
箕曲在弘	MINOO Arihiro
山本須美子	YAMAMOTO Sumiko
* Chief Editor	

『白山人類学』投稿票

記載日: 年 月 日

ふりがな 投稿者 氏 名	
所属機関・職	

投稿の種類（丸で囲む）	論文 研究ノート 翻訳 資料 書評 資料・研究活動紹介 フィールド通信		
タイトル（日本語）			
タイトル（英語）			
本文の総枚数（英文要旨は除く。注は含める）	400 字詰 枚	図・表・写真の有 無と点数	有 ・ 無 点
使用したワープロソフトの種類（原則として MS ワード）、ソフトのバージョン、保存した電子媒体の種類、E メールにより投稿した場合は送信した日付			

連絡先（所属機関、自宅のいずれでも可。住所とEメールアドレスは必ず記入すること）

住所			
電話番号 （任意）		FAX 番号 （任意）	
E メールアドレス			

* 投稿票は、白山人類学研究会ウェブサイト（下記）でダウンロードできます。

<http://hakusan-jinruigaku.toyo.ac.jp>

白山人類学

第 20 号

発行日

定価：本体 2000 円＋税

2017 年 3 月 31 日

編集：発行

白山人類学研究会

〒112-8606 東京都文京区白山 5-28-20

東洋大学社会学部 松本誠一 気付

印刷

新村印刷株式会社

〒135-0045 東京都千代田区九段北 3-3-5

TEL 03-3264-6511

FAX 03-3264-7106

発売

岩田書院 (Iwata Shoin)

〒157-0062 東京都世田谷区南烏山 4-25-6-103

TEL 03-3326-3757

FAX 03-3326-6788